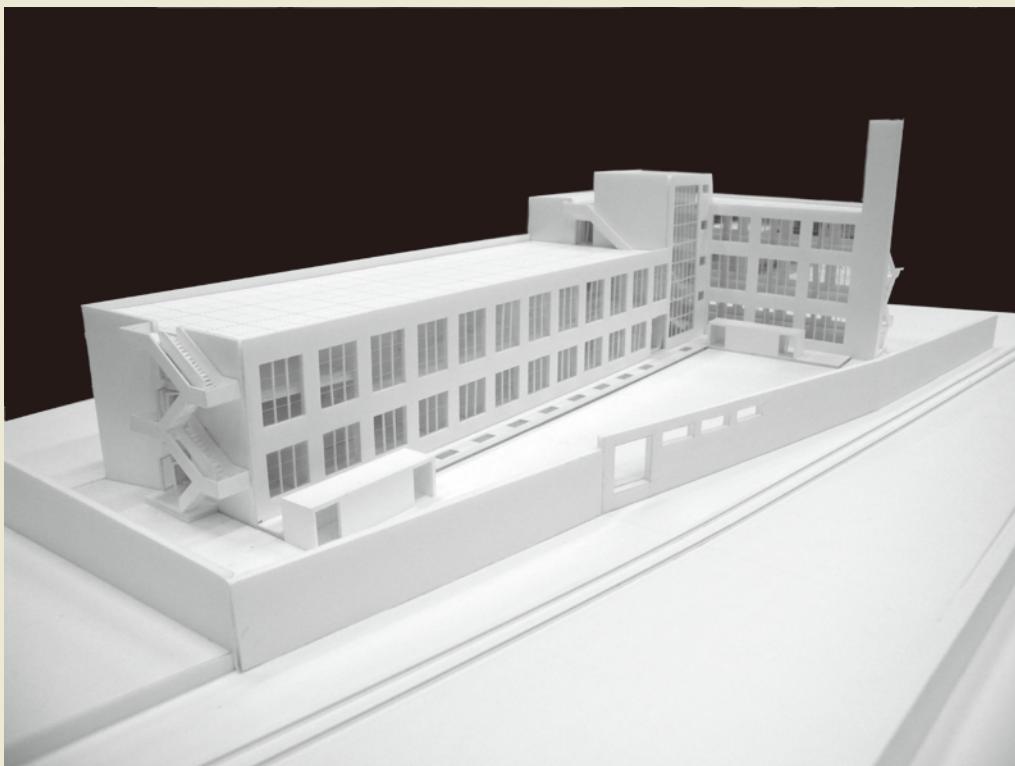


緑

アオバト

鳩



小樽地方貯金局模型(現市立小樽文学館・美術館)

旧小樽地方貯金局(1952年)の創建図面と小坂秀雄

駒木定正

1. 緒言

小樽地方貯金局(小樽市色内1丁目、図1)は1950年(昭和25)9月23日に着工、1952年9月22日に鉄筋コンクリート造3階建、地下1階、延面積4,513m²で完成した。設計は郵政省大臣官房建設部建築課長の小坂秀雄(1912-2000年)、施工は大成建設であった注1)。

1975年ころまで貯金局として使用し、現在市立小樽美術館・文学館に転用され市民の文化活動の拠点となっている。正面(南側)は市道浅草線に沿い日本銀行旧小樽支店(1912年、設計:辰野金吾・長野宇平治・岡田信一郎)と向き合い、敷地の西は旧幌内鉄道(1882年手宮一幌内間開通)線路跡地の遊歩道と接し、周辺は明治・大正・昭和の銀行と商社及び近代化遺産による歴史的なまちなみを形成している。

本稿は小樽において明治末から始まる為替貯金支局の誘致活動を経て1916年(大正5)に開局した際の仮庁舎、1918年新築の木造庁舎、第二次世界大戦後のRC造の小樽地方貯金局の新築に至る過程と各建築の特色を概説し、小樽地方貯金局の創建図面に関する調査・研究の報告は行われてきた注2)が論文の発表は本稿が初めてとなる。小坂秀雄の設計と業績は、小坂自身の論考、作品集、郵政建築の沿革史、観音克平らの既往論文がある注3)。



駒木定正

近畿大学理工学部建築学科を卒業、一級建築士の資格を取得。

北海道大学において「明治前期の官営幌内炭鉱と幌内鉄道の建築に関する歴史的研究」で工学博士の学位を取得。

小樽市文化財審議会会長、小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観審議会会長、小樽観光大学校運営委員会委員を務める。

北海道新聞社から『小樽の建築探訪』など著書多数。

現在、駒木定正建築史研究所、北海道職業能力開発大学校特別顧問。



市立小樽美術館
otaru city museum of art

ISSN 1882-3815

2. 為替貯金支局から地方貯金局までの建築概要

2-1誘致と仮庁舎

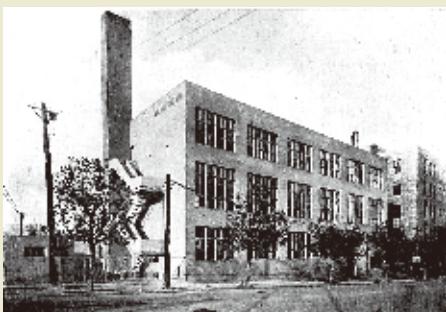


図1 小樽地方貯金局(『小樽地方貯金局五十年史』)



図2 小樽商業会議所(『東宮行啓記念 小樽区写真帖』)

を並立させた洋風建築であり、外観は壁を淡彩、柱と開口部の額縁、軒と腰壁に明度の低い色を配した。誘致期成同盟会は改修費5,760円を出資し、本館を事務室に会議室を原簿室に転用した。新庁舎落成後に再び会議所となるが1919年に焼失。



図3 小樽商業会議所の場所
(「小樽区之図」一部)

2-2小樽為替貯金支局庁舎

小樽区は誘致の条件であった庁舎を木造洋風2階建で新築した(図4)。起工1918年3月3日、竣工同年9月6日、総工費28,899円。設計は通信省、監督は技師の武富英一、技手の柿沼稠吉が担当、工事請負は小樽の大虎・加藤忠五郎。本館の延面積180坪、付属建物は木造平家49坪5合注5)。



図4 小樽為替貯金支局(『小樽地方貯金局五十年史』)



図5 小樽為替貯金支局の場所
(「小樽区之図」一部)

2-3小樽地方貯金局庁舎

業務拡大に伴い近隣建物を貸借で補っていたが、1947年新庁舎の敷地(色内1丁目)を購入し、戦後の郵政建築では初期となる鉄筋コンクリート造を採用、デザインは四角形を基調とし合理主義にもとづいて統一した。

職員の回想によれば、「実に「目の覚めるような」美しいものであった」「宮殿にでもいるかのような、自分たちがプリンスにでもなったような、気高い幻想にとらわれた」「庁舎移転を機として職員の気風は明るい落ち着きのある、自らの品性が備わってきたのであ

った」と記す注6)。

全国の貯金局関連建築の沿革と小樽地方貯金局を概括すれば、煉瓦造は大阪(1896年)と東京(1910年)、RC造は第二次世界大戦前に東京(31年、設計大蔵省)、熊本(36年、設計山田守)、広島(37年、設計山田守)に建築、戦後小樽地方貯金局が初めてRC造の新築であった(増築では熊本(50年)が先行)。戦前戦後を通して木造庁舎が一般であり、RC造が普及するのは1955年の京都地方貯金局(設計小坂秀雄)以降になる注7)。

3 建築図面

小樽新築の青焼図面38枚が市立小樽文学館に保管されている(表1)。2種類に大別され、1つは配置図、平面図、立面図などの一般図21枚(図名欄あり)と2枚の詳細図(図名欄なし)、2つ目は配筋図で図名欄のある13枚と未掲載の2枚であるが、両方とも破損が著しい。図名欄には「郵政省大臣官房建築部」「工事 小樽地方貯金局新築工事」の標題と図名、縮尺、図面番号、年度および設計、製図、写図、校閲の印欄がある。寸法はメートル法を採用している注8)。配筋図は1950年代のRC造の設計と構造を確認する上で貴重である。

表1 創建時図面一覧(上段:一般図 下段:配筋図)

郵政省大臣官房建築部					
小樽地方貯金局新築工事					
図面名	縮尺	No.	設計	製図	校閲
配置図	—	1/21	小坂	小坂	(未)
平面図 地階	1/100	2/21	小坂	小坂	(未)
平面図 一階	1/100	3/21	小坂	小坂	—
平面図 二階	—	4/21	小坂	小坂	—
三階・屋階平面図	—	5/21	小坂	小坂	(未)
立面図 その1	1/100	6/21	小坂	小坂	(未)
立面図 その2	1/100	7/21	小坂	小坂	(未)
断面図	1/100	8/21	小坂	梶	小坂
断面図	1/100	9/21	小坂	梶	小坂
矩計 その1	1/20	10/21	小坂	石田	(未)
矩計 その2	—	11/21	小坂	石田	—
表玄関詳細	1/20	12/21	小坂	石田	(未)
玄関廻り其他詳細	1/20	13/21	小坂	森	(未)
階段ソノ他詳細	1/20	14/21	小坂	吉宮	小坂
階段室詳細	1/20	15/21	小坂	吉宮	小坂
便所・浴室詳細	1/20、1/50	16/21	小坂	石田	小坂
湯沸・雜ム手・売店・厨房詳細	—	17/21	小坂	石田	小坂
避難階段煙突詳細	1/20	18/21	小坂	森	(未)
天井伏	1/200	19/21	小坂	森	(未)
建具表	1/200、1/50	20/21	小坂	石田	小坂
仕上表	(未)	21/21	小坂	(未)	小坂
裏玄関詳細	1/20	(未)	(未)	石田	(未)
エレベーター機械室・湯沸室床、裏玄関一階梁	1/20	(未)	(未)	岩木	柏木

<凡例> 「-」は判読不能、「(未)」は未記入

郵政省大臣官房建築部					
小樽地方貯金局新築工事					
図面名	縮尺	No.	設計	製図	校閲
イ様配筋図	1/20	(1)/13	小坂	赤松	柏木
ロ様配筋図	1/20	(2)/13	小坂	—	(未)
基礎・柱・梁・床版配置図	1/200	(3)/13	小坂	赤松	柏木
梁断面図(その1)	1/20	(4)/13	(未)	(未)	(未)
梁配筋図(その2)	1/20	(5)/13	(未)	(未)	柏木
梁断面図	(未)	(6)/13	小坂	(未)	柏木
柱断面表	1/20	(7)/13	小坂	國分	柏木
塔屋屋根板・玄閣階段版配筋図	1/20	(8)/13	小坂	佐藤	柏木
床版配筋図(I)	1/20	(9)/13	小坂	大木	柏木
床版配筋図(II)	1/20、 1/10、1/100	(10)/13	小坂	大木	柏木
床版配筋図(III)	1/20	(11)/13	(未)	大木	柏木
壁及耐震壁基礎配筋図	1/20	(12)/13	小坂	(未)	柏木
イ様基礎配筋図	1/20	(13)/13	(未)	吉岡	(未)
(未記載:配筋図)	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)
中二階交換室床版梁図	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)

<凡例> 「-」は判読不能、「(未)」は未記入

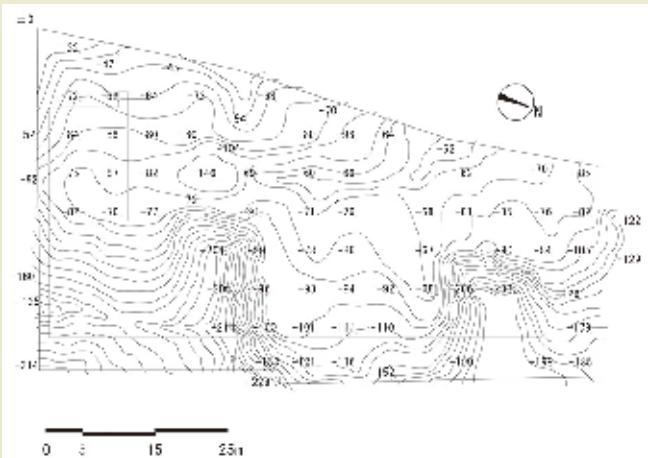


図6 敷地形状図(作図:坪田丈嗣)

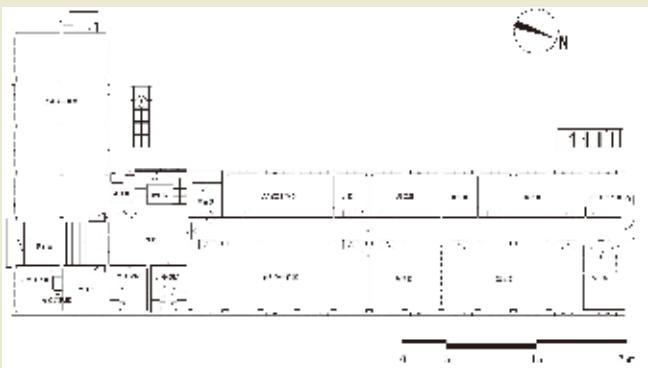


図7 1階平面図(作図:坪田丈嗣)

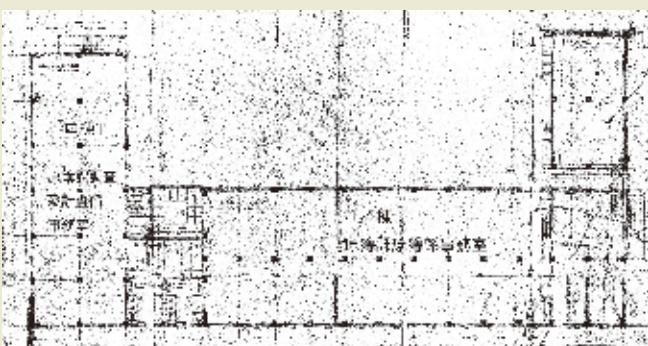


図8 「平面図 二階」(製図:小坂秀雄、文字筆者加筆)

階		主な部屋
1階	イ棟	喫茶室、浴場、洗面所、社務室、売店、販賣、会議室、販賣室、木工室、書類の記録室(文書庫)
	口棟	下産室、監査(小室)
2階	イ棟	便所、喫茶室、販賣室、会議室、販賣室、木工室、浴場、洗面所、会員室、会員室、男更室、女更室、レンタル室
	口棟	会員室、書類室、会員室、会員室、常勤事務室(1・2階)、応接室
3階	イ棟	男子更衣室、女子更衣室、貯物室(2階)、和洋室(2間)、休憩室
地下	口棟	運送業者及卸業者用室
	イ棟	男子更衣室、女子更衣室、湯沸室、1F
地下	口棟	化粧室、金庫及取扱室

表2 各階居室一覧

配置図には敷地の高低差を示し、市道浅草線と旧幌内鉄道線路用地が交わる南西隅を基準点とし、浅草線と接する東隅(海側)では2.1m低い。敷地は台形状で、浅草線沿いの東西方面は約47m、旧三井物産小樽支店側の南北方向は73m、北東隅から線路用地までの東西方向は約30mである(図6)。

建物の配置は、南北方向の「イ棟」(2階一部3階建、地下1階)と東西方向の「口棟」(3階建、地下1階)をL字状にする。西に中庭を設けたのは、列車の音を遠ざける配慮と推察され、RC造の屏を設置していた(図12)。地盤が低い口棟の東に正面玄関を配して床高を調整し、イ棟南にガラス張りの階段室、エレベーター、洗面所を集中させる。

主な居室配置(表2)は、イ棟1階に管理諸室(管理・業務課、局長室、会議室)と医療・休憩関係室などを配し、イ棟2階と口棟1・2・3階に事務室を設けた。事務室は間仕切りが無く桁行方向の2面に縦長窓を連続させ、明るい室内環境を作った(図14)。

柱間の基本寸法に規則性があり、イ棟柱間は桁行を4.0mとし11スパン、梁間を7.8mとし2スパン、階段室・洗面所の共用部は桁行4.5m、2スパン、梁間5.2m 3スパンで設計。口棟柱間は桁行を5.2mとし6スパン、梁間5.2mを2スパンとする。

階高(水平基準面は床スラブ)は、地階—1階、1階—2階、3階—屋上をそれぞれ4.0mとし、2階—3階のみを4.85mとして他よりも高く設計する。梁成は梁間の関係でイ棟が大きく、地中梁1,350mm、1・2階700mm、屋上650mmとし、口棟の地中梁1,000mm、1・2階550mm、3階・屋上500mm。梁の端部に垂直ハンチを設け、各階床スラブ上端までの成はイ棟で1・2階1.1m、屋上1.05m、口棟では1・2階0.8m、3階0.75m、屋上0.5mで設計する。



図9 西面立面図(作図:坪田丈嗣)

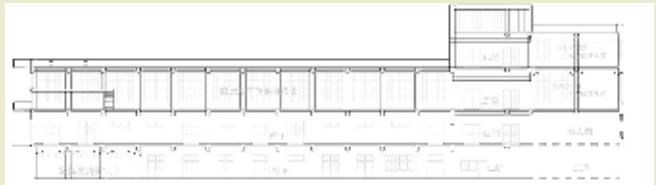


図10 桁行断面図(作図:大岡慎一朗)

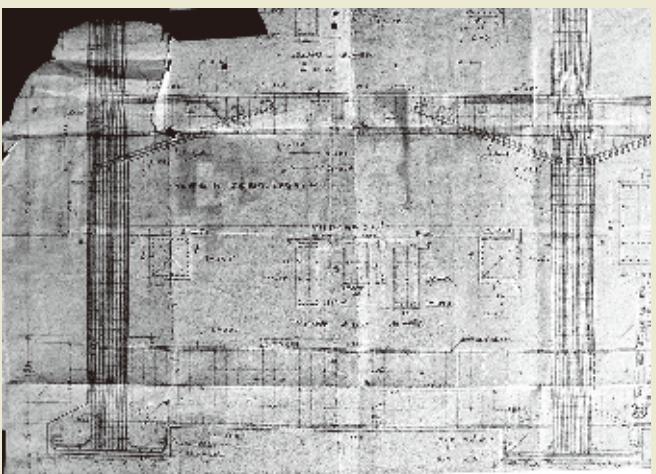


図11 「イ棟配筋図」一部(製図:赤松某)

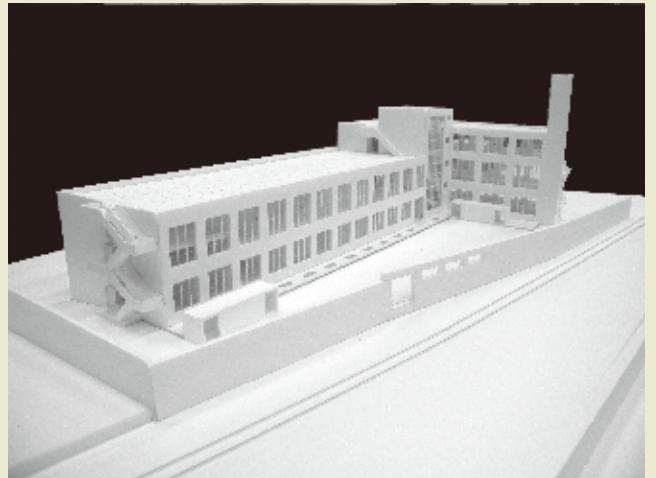


図12 小樽地方貯金局模型(制作:坪田丈嗣、大岡慎一朗)

4. 小坂秀雄と小樽地方貯金局

小坂秀雄は1935年に東京帝国大学建築学科を卒業、東京松田建築事務所を経て、37年通信省経理局営繕課に入省。山田守と吉田鉄郎の下で勤務(44年・吉田・45年山田退職)、戦後復興期の郵政建築を管理・指導する職位に就き、46年通信院営繕部設計課長、49年郵政省建築課長(前掲)、54年から退職の63年まで設計部長として郵政建築をリードした。

小樽地方貯金局設計時には郵政以外でも業績を挙げ、51年に東京通信病院高等看護学院で日本建築学会賞受賞、52年外務省庁舎設計案採用、53年に愛知県文化会館設計競技1等入選。「学会賞を戴くにあたりて」^{注9)}では「敗戦と社会不安の下に於けるこの貧乏国の、凡ゆる困難な制約の下に営まれる一般の人々のための、数多い普通の建築の一つのありかたを示してゐる」と記し、この時小樽地方貯金局を設計中であり、時代背景と設計姿勢を述べる点で注目される。

郵政を退職後は丸ノ内建築事務所を開設し、当初植木襄(構造担当)、中里英二、梶外美男、山中智恵子(事務担当)が参画した^{注10)}。主な設計は通信ビル(通信総合博物館、1964年)、KDDビル(74年)、ゆうばうと(81年)、KDD大手町ビル(92年)他、外務省関連では本庁舎増築(70年)、パキスタン、カナダ、インドネシア、モンゴル等の事務所・公邸、名古屋鉄道関連では名鉄犬山ホテル(65年)、名古屋丸栄百貨店ビル(69年)他、枚挙に違がないほどの活躍を展開した。

5. 設計者スタッフについて

小樽地方貯金局新築中の1951年郵政省大臣官房建築部(部長中山広吉)の組織は、設計課(課長小坂秀雄)と施工課(課長松野二男)があり、設計課に調整、第一設計、第二設計、仕様構造、電気設備、機械設備の各係、施工課には施工、工程、積算、資材、保全の各係があつた^{注11)}。

小樽地方貯金局新築図面の押印欄の「設計」は唯一小坂、「製図」の配置・平面・立面角都も同印があり、小坂秀雄は設計を主導し基本図面も自ら担当した。「校閲」欄の柏木は設計課仕様構造係長の柏木多助。「製図」では第一設計所属の石田文敏、森倅朗、国分守行、第二設計の梶外美男、仕様構造の吉岡正巳、岩木遼、大木康次、このほかに古宮節二、佐藤某、赤松某が担当した。

小坂は1950年当時の郵政省と電気通信省の建築部門の状況について、建築工事量に対して担当技術者数の割合が少ないことをあげ、能率的、標準化によって設計等の業務を簡素化し、官庁建築として普遍的で質の高い標準設計の必要性を述べる^{注12)}。建築のみならず組織と業務においても一貫して合理性を求め、戦後の官庁建築のレベルを高めようとした姿勢が窺われる。

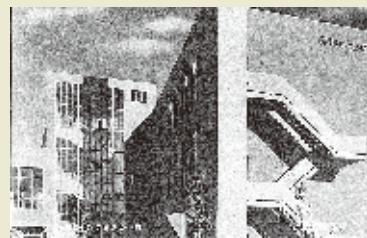


図13 西面外観(市立小樽文学館蔵)



図14 2階事務室(市立小樽文学館蔵)

くにあたりて」^{注9)}では「敗戦と社会不安の下に於けるこの貧乏国の、凡ゆる困難な制約の下に営まれる一般の人々のための、数多い普通の建築の一つのありかたを示してゐる」と記し、この時小樽地方貯金局を設計中であり、時代背景と設計姿勢を述べる点で注目される。

郵政を退職後は丸ノ内建築事務所を開設し、当初植木襄(構造担当)、中里英二、梶外美男、山中智恵子(事務担当)が参画した^{注10)}。主な設計は通信ビル(通信総合博物館、1964年)、KDDビル(74年)、ゆうばうと(81年)、KDD大手町ビル(92年)他、外務省関連では本庁舎増築(70年)、パキスタン、カナダ、インドネシア、モンゴル等の事務所・公邸、名古屋鉄道関連では名鉄犬山ホテル(65年)、名古屋丸栄百貨店ビル(69年)他、枚挙に違がないほどの活躍を展開した。

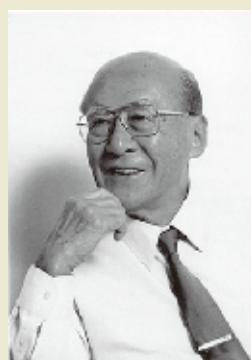


図15 小坂秀雄(『小坂秀雄の建築』)

1912年(明治45)	6.18 東京日比谷公園内松本樓に生まれる
1935年(昭和10)	3. 東京帝国大学工学部建築学科卒業 4. 東京松田建築事務所勤務
1937年(昭和12)	9. 通信省経理局営繕課
1946年(昭和21)	4. 通信省営繕部設計課長
1949年(昭和24)	4. 郵政省大臣官房建築部設計課長
1951年(昭和26)	「東京通信病院高等看護学院」昭和25年日本建築学会賞受賞
1952年(昭和27)	9.22 小樽地方貯金局竣工(着工50.9.23) 外務省庁舎設計競技実施案入選 愛知県文化会館設計競技1等入選
1953年(昭和28)	2. 郵政省大臣官房建築部長
1954年(昭和29)	1960年(昭和35) 皇居造営建築委員会委員
1963年(昭和38)	(株)丸ノ内建築事務所代表取締役
1970年(昭和45)	前島賞受賞
1996年(平成8)	(株)丸ノ内建築事務所名誉会長
2000年(平成12)	3.23 逝去 享年87歳

表3 小坂秀雄の略歴(『小坂秀雄の建築』を基本)

6.まとめ

本稿は小樽地方貯金局(1952年)の創建時図面の内容と建築家小坂秀雄の関わりを概説した。その後小坂をリーダーとする郵政建築が目指したモダニズム建築の基礎資料としたい。

<注>

注1)郵政省:郵政百年史資料、27、建築資料集、建築年表pp。

382-384、1971. 3

注2)市立小樽文学館企画展「トポス(場)の思想と創造—建築家・

小坂秀雄と小樽文学館」、2009.4.25-6.28。市立小樽美術館開館40周年記念特別講座「小坂秀雄とモダニズム建築～歴史的建造物との関わりの中で～」、講師筆者、2019. 7.6。筆者:小坂秀雄とモダニズム建築～歴史的建造物との関わりの中で～、緑鳩、臨時増刊号、市立小樽美術館、2019. 7.6。「機能美の勝利 小坂秀雄の建築と一原有徳」展、市立小樽美術館一原有徳ホール、2020. 2.29-9.22

注3)小坂秀雄:官庁営繕機関統一の問題、建築雑誌、1947. 12。同:

庁舎建築はどうあるべきか(官庁営繕の立場から)、建築雑誌、1984. 3.『小坂秀雄の建築』刊行委員会:小坂秀雄の建築、2001. 5.25。郵政大臣官房建築部:郵政建築 通信からの軌跡、建築画報社、2008. 12.5。観音克平・木村智:郵政スタイルと通信ビル、日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)、2014.9.

注4)小樽貯金センターの教示によれば、1886年3月に大阪と下関(赤間関)、1910年に福岡に郵便貯金支局開設

注5)小樽市役所内小樽市史編纂係:昭和十九年蒐集 小樽貯金支局沿革誌抜粋、市立小樽図書館蔵

注6)小樽地方貯金局:小樽地方貯金局五十年史、1966. 8.1.、市立小樽図書館蔵

注7)郵政省:郵政百年史資料、27、建築史料集、建築年表pp。

357-405、1971. 3.

注8)小坂秀雄「通信建築の標準設計概要」(日本建築学会関東支部研究報告、1950. 5.)によれば、木造について「終戦後今日迄は…寸法は総てメートル整数性を用うる。之には始め種々の障害もあったが現在では殆んど容易に行われているし、標準寸法としても都合よい場合も多い」と記し、RC造においても同様と考えられる。

注9)小坂秀雄:学会賞を戴くにあたりて、建築雑誌、1951. 6.

注10)中里英二:小坂さんの思い出、小坂秀雄の建築、2001. 5.

注11)郵政省:郵政省職員録(上)、昭和26年11月1日現在

注12)前掲注8)

日本建築学会北海道支部研究報告集、No.93、2020年6月の掲載に加筆